

# 中等教育学校における6年一貫古文教育の理論と実践

## － 第三回 中学年「古文との対話」その2 －

金沢 節子

### 1. はじめに

『研究紀要第46集』（2005年度）・『研究紀要第47集』（2006年度）において、「中等教育学校における6年一貫古文教育の理論と実践」を表題として、「6年一貫古文教育の理論」その1・その2（修士論文より一部抜粋）及び、その理論に基づいた授業実践の概要である低学年（1・2年生）「古文世界へのいざない」・中学年（3年生分）「古文との対話」を執筆しました。今年度は、「6年一貫古文教育の理論」その3及び、中学年（4年生分）「古文との対話2」の授業実践を掲載します。

### 2. 中等教育学校における古文教育の理論 その3

#### 2-1 古文教育の構造化

##### （1）古文教育の構造化とは

第二次世界大戦後、国語教育の再出発に際し、戦前の古典教育への反省と新しい古典教育のあり方を求める論争が活発におこなわれ、多くの論文が発表された。それらを精査・検討した結果、中等教育（中学・高校）における古文の教材研究、授業実践、及び6年一貫古文カリキュラムの作成のために、「ことばと文学」「時代性と現代性」「民族性と国際性」の三つの軸を想定し、古文教育の構造化を試みた。

三つの軸は「ことばと文学」「時代性と現代性」「民族性と国際性」のそれぞれの事項を両端として、反対の端に向かって事項の要素が通減していき、中心は両事項の要素が半々に混ざり合った状態のものとする。「ことばと文学」を主軸として、その軸に「時代性と現代性」軸と「民族性と国際性」軸が交差し、主軸上を自由に移動し、また自身の軸も可動する。各軸の交点を自由に動かしながら教材研究をし、授業の構想を練るというのが「古文教育の構造化」である。つまり、学習の目標、教材選定、学習内容と方法等について考える時、まず「ことばと文学」軸上で学習目標の重点位置を設定して教材を選ぶ。そして、その重点位置と交差する「時代性と現代性」と「民族性と国際性」について、その度合いを軸の移動によってさまざまに勘案し、生徒の反応なども予測して授業を構想するというものである。このように教材研究、教案作成、授業展開の予測と実践を三つの軸の交差と移動によって構想することができれば、古文の授業は多面的なものとなり、生徒の古文への理解を一層深めることができる。と考える。

また、中等教育学校において、各学年の生徒の成長に適合し、しかも六年間の見通しと一貫性のあるカリキュラムの作成には、このような構造的考察なくしては不可能である。と考える。六年間の見通しを持たないカリキュラムでは、授業は教科書のみを頼りとしてその時の思いつきに流れやすく、また問題演習で単語と文法の暗記を主とした受験対策的な授業に陥ってしまうおそれがある。（修士論文より抜粋、一部修正、研究紀要46集と一部重複）

##### （2）「時代性と現代性」について

古文教育における現代的な意味についても多くの論評が発表され、論争が行われている。また、「古

文教育に関する質問紙調査」(筑波大学生対象・紀要には不掲載)の結果によると、「古文を学ぶ現代における有用性」を疑問とする回答も多数あった。それらを精査・検討して「古文教育における現代的な意味」を「時代性と現代性」軸として捉え、古文教育の構造化の中でその意味を考察した。

古文教育の現代的意味に関する論争は、戦前の古典教育が時代精神や道德規範のための学習に堕したことに對して、再びその轍を踏まないための古典教育のあり方と方法を模索するために行われた。それを精査すると、

- ① 時枝誠記氏は、「古典を読むことは失はれた世界を取り戻すことに外ならない」ことであるから、「教材としての古典は、必ずしも現代的意義や要求からだけで取捨選択されてはならない」「古典は、現代とは異った歴史的社会的条件の下に制作されたものであるから、そこに現代的意義を求めることは、厳密な意味に於いて不可能なことである」<sup>注一</sup>と述べ、古典に對して、己を空しくして、これを正確に忠実に理解する能力や媚びない峻厳な態度を養うことが大切であるとしている。
- ② 増淵恒吉氏は、「古典の中には、現代に生きているものもあれば、現代的意義の認められぬものもある。古典の中から生かすべきものと抹殺すべきものとを見分け、生かし得べきものを、生活の中に具現していくのが古典を読む心構えであるべきである。そうした批判的態度を持するものでなければ、戦争中のような神がかりに堕してしまうことになる。」<sup>注二</sup>と、古典の現代的意義による教材の批判的選択を主張している。
- ③ 長尾高明氏は、「古典教育の現代的意義とは、内容の直接的な結びつきの面にのみあるのではなく、むしろその成立の過程や発想の基盤を考えることによって、現代のわれわれの問題意識となり得る点にある。すなわち、ある時代背景のもとで、人々が、何を見、何を考え、いかに生きたかというさまを、心の記録である文学作品を通して読み取ること、それが結局は、現代という状況における自分たちの生き方を観察し考察する目を養うことにもなるのである。」<sup>注三</sup>と述べている。
- ④ 西郷信綱氏は「古典と呼ばれるものはどこにあるかといえ、それは過去と現代のあいだ、つまり過去にぞくするとともに現代にもぞくするというほかない。日附がいかに古かろうと、文学として訴えてこなければそれは古記録で、現代人に対話をよびかけてくる力をもったもののみが古典である。」<sup>注四</sup>と述べている。
- ⑤ 加藤周一氏は「古典との接触がなければ、今日の状況を普遍性に向かつてひらくことができないと同時に、今日の立場にたたなければ、古典はそれ自身が含む普遍性をわれわれに啓示しない。」<sup>注五</sup>と述べている。

いずれにも、古文を学ぶ現代的意味を考えるための重要な示唆が含まれている。それらの主張から、古文を学ぶ現代的意味は、

- ① 古文を学習することは、過去と現代との対話である。
- ② 対話とは、まず、過去の人々の生きた時代背景、生き方や考え方を正確に理解することである。

注一 『国語教材に於ける古典教材の意義について』時枝誠記 1948 年 4 月「国語と国文学」至文堂

注二 『古典教育』増淵恒吉 1956 年 4 月「国語と国文学」至文堂

注三 『古典指導の方法』長尾高明 1990 年有精堂

注四 『日本古代文学史 改訂版』西郷信綱 1963 年岩波書店

注五 『古典の意味について』加藤周一 1978 年「加藤周一著作集 3」平凡社

それを通して、現代に生きる人々に通ずる生活や文化の普遍性と変化を認識することである。

- ③ その結果、現代人のあり様を認識し、未来の方向も探ってみること、そしてまた過去に生きた人々への問いかけを繰り返すこと。

と、まとめることができる。このように古文教育を考えると、古文作品の持つ「時代性」と「現代性」は対立するものではなく、「時代性」と「現代性」の対話として、授業での重点を「時代性と現代性」という軸上に表し選定することができる。

また、心理学者である河合隼雄氏は、次のような古典とのかかわりを述べている。「現在のように科学技術が発達してくると、人間はこれまで不可能と思っていたことでもどんどんできるようになって、下手をすると科学技術万能の考えに陥りやすい。人間が実際に生きてゆく上においては、それとは異なる思考が必要であり、その点において、「物語」ということが非常に大切になってくる。人間はその生涯にわたって、一人ひとり固有の「物語」を生きているのだ。このように考えると、日本の古い物語を読むことが、現代に生きることへとつながってくるのである。」<sup>注六</sup> 一人の人間として、古文の「物語」を読む意味と面白さを説いている。

中等教育学校古文カリキュラムでは、まず、生徒が身近にあるさまざまな古文作品を楽しく、面白く感じられることから授業を始める。そして生徒たちが、古文の作品から、それぞれの時代の感じ方、考え方、生き方を読み解くという「問いかけ」を通して、現代にも生きている過去やそのつながりの意味を理解し、かつ未来を考えるという「回答」を得、また過去への「問いかけ」を繰り返すことができる授業のあり方が見えてくる。(修士論文より抜粋、一部修正)

### (3)「民族性と国際性」について

現代社会は、人、物だけでなく文化の国際化が急速に進んでいる。国際化のためには、たがいの国の歴史、民族の文化についての知識や正しい認識をもつことが最低限必要なことである。古文教育は伝統的文化、文学やことばについて学ぶ大切な機会である。国際化に対応する古文教育のあり方を「民族性と国際性」という軸上に捉え、古文教育の構造化の中でその意味を考察した。

民族性や民族主義(ナショナリズム)ということばには、民族の独立、独自性を象徴すると同時に、民族と民族の対立という対抗的、排外的な意味も含んでいる。国際性や国際化(グローバリズム)には、国家・企業・団体・個人の間の平和的交流や共存の意味と同時に、強国の基準や価値観を世界に浸透させようとする強制、対立・抗争という事態もともなっている。日本も、明治から昭和にかけて、一部の古典を拠りどころとして導き出された「八紘一宇」や「神の国」を日本人の精神的支柱として天皇制と軍国主義を基盤とする国家体制を造り、アジア侵略、太平洋戦争を引き起こし、敗戦にいたる歴史を演出したナショナリズムの経験がある。それゆえに、「民族」ということばには、その意味を十分に吟味し、その意味を明らかにしておく必要がある。

古文教育において、日本の古典文学やことばを学習することは、(2)で述べたように、過去との対話であり、日本の古典文学やことばのなかから、日本人の心情や思考を知り、また自己認識を深めることである。それは、決して、自国の優秀性を誇り、それを他国へ強制したり、同化を求めたりするものであってはならない。まして、戦前の教育思想の復活などはない。

自国の古典文学やことばを学習することの意味を、2002年9月29日、スイスのパーゼルで開かれ

注六 『物語を生きる』河合隼雄 2001年 小学館

た国際児童図書評議会において、美智子妃が行われたスピーチの中で端的に述べられている。自分の幼い頃の読書に触れられ、「日本の神話や伝説の本は、非常にぼんやりとではありましたが、私に自分が民族の歴史の先端で過去と共に生きている感覚を与え、私に自分の帰属するところを自覚させました。このことは後に私が他国を知ろうとする時、まずその国に伝わる神話や伝説、民話等に関心を持つという、楽しい他国理解への道を作りました。」<sup>注七</sup>と述べられている。神話や民話だけでない、物語や和歌の学習を通して、他国の物語や詩歌に、さらにことばにも関心を持つこと。また、外国の人々との交流によって、お互いの考え方や美意識、価値を知りたいと思うことは、ごく自然なこころの動きではないだろうか。

『ハリーポッター』を読みながら『もののけ姫』を考え、『古事記』を読めばギリシャ神話の関心へと向かい、『落窪物語』と『シンデレラ物語』を比較したりすることは可能であろう。今後のグローバル化は個人の交流が広がり、個人を通じて国と国、民族と民族の交流へと広がって行われてゆくだろう。それを可能にするには、個人としてのアイデンティティだけでなく、日本人としてのアイデンティティも必要である。日本の伝統と文化、特に日本語と日本文学に対する知識や見識を持つことは、日本人のアイデンティティのルーツを探り、確かめることになる。日本人としての根っこを育てることによって、他国や他民族の人々との一層の理解と交流が深まると思う。これが古文教育における「民族性と国際性」軸である。

## 2-2 中学年（3・4年生）の古文教育について

中学年の生徒の特色－「個の模索・探求と発見」、及び古文教育における成長段階の目標－「古文との対話から個の発見を促す」は第二回で記述した。今回は4年生での学習内容を記述する。

### （1）4年生での学習の内容

- ① 四年生では、ジャンルにこだわらず、自然、愛、信仰、旅等をテーマとして、日本人の価値観・恋愛観・自然観等を学習する。
- ② 三・四年生を通して、心情を表すことば、ことばの変遷、表現の特色、和歌の修辞、文語文法の基礎等を学習する。

『枕草子』や『徒然草』から古人の感性や人生訓を学習する。生徒たちは、このような古人の内面や感性、考え方に触れ、時には自由に話し合い、現代にも通じることや自己にもあてはまる感じ方や考え方を、見つけ出すことができると考える。古文には、日本の自然をどのように生活に取り入れるかという知恵、日本人の自然との一体感が多様に表現されている。山田宗睦氏は、「日本人の精神構造の中にある、自然物と心とを一つの〈もの〉、つながりを持った〈もの〉としてとらえる。日本の和歌は、他に寄せて思いを陳べる（寄物陳思）表現形式でした。何かある一つの自然の物が動いてゆく。そのことにかけて自分の心の状態を述べる、物と心とが〈もの〉として一つなんだ。これがまさに日本人の意識形態です。」<sup>注八</sup>と述べている。

愛は永遠のテーマであるが、上代から近世に至るそれぞれの時代の様々な恋愛模様は、生徒たちにとっていちばん心のときめくものである。その中で、愛の持つ厳しさも読みとっていきいたい。男女の愛だけでなく親子の愛も取り上げる。また、信仰に生きる人々の姿、旅に憧れ旅を棲家とする

<sup>注七</sup> 朝日新聞夕刊 2002年9月30日

<sup>注八</sup> 『日本人の美意識』 山田宗睦 1974年 朝日新聞社

人々、そこには日本人のそれぞれの時代に生きる喜び、悲しみ、怒り、楽しみ、苦しみを読みとることができる。

古文をよりいっそう深く理解するために、日本語の特色を、その構造、音韻、ことばの意味の変遷についても学習する。また、折句や掛詞、いろいろなことば遊びによって、ことばの持つ面白さを知り、古語への関心を高める。作品や文章の中で使われていることばのもつ意味、ことばの役割、ことばのつながりを理解する。その中で、日本語を意識化し、自分の使っている言葉を見直し、自分のことばを豊かにする。

## (2) 4年生での学習活動の特色

- ① 4年生では助動詞を中心に、文章に即しながら学習し、時期を見て文法の基礎の体系的な理解をはかる。同時に、ことばへの関心を高めるよう配慮して授業をする。
- ② 古文の多読、精読を織り交ぜながら、古文を読むうえで必要な知識を随時学習する。
- ③ 百人一首では、古文に関する知識や逸話、歌の意味を学習する。

(修士論文より抜粋、一部修正)

## 3. 中学年(4年生)の古文教育の実践

今年度も2003年度から引き続き古文を担当してきた学年(現在4年生)で古文の授業を実践した。既述した「6年一貫古文教育論の理論」に基づいた授業計画とその実践の試みを報告する。

### 3-1 今年度の古文の授業

#### (1) 授業概要と時間

古文教育の理論では、4年生で自然、愛、旅などのテーマに基づいて、随筆、日記を読み、古人のものの見方、感じ方、考え方に触れることを計画していた。しかし、1年～3年までの国語の授業の中で古文に割り当てた時間数及び、生徒の理解度などの学習の様子から、「6年一貫古文教育の理論」に基づいて作成したカリキュラムに修正を加えることになった。2年生では『平家物語』を冒頭から壇ノ浦まで、要所を解釈しながら通読すること、3年生ではさまざまな説話からその面白さと不思議さを感じとることを主とした。生徒たちは2・3年生における古文の解釈や暗唱によって、古文を読むことに慣れ、古い時代の事件や人の生き方に興味を持つことができるようになった。そこで、4年生では、もう一步、古語や古い時代のものという歴史的な障壁を乗り越え、古文の世界にも自己を発見しようという意識を高めることを考えた。そこで、随筆、日記というジャンルから生徒の成長段階に合った教材をできるだけたくさん読み、古人のものの見方、感じ方、考え方と自分自身のものの見方、考え方を比較し、深めることができる授業を試みた。そのため、4年生で扱う予定であったテーマ「自然、愛、旅」は、前述した4年生での学習を積み重ねた後に扱えるものであり、5・6年生のカリキュラムに移すことにした。

古典文法では、3年生で動詞が予定通りに終了し、生徒の中にも定着できたと判断し、形容詞、形容動詞、及び基本的な助動詞を学習する計画を立てた。文法は随筆・日記の一作品が終わった後に、集中して授業を行う形にした。

古文単語は、筑波大学から戻って3年間、研究課題としてきた自作の「古文ことば集」が完成したので、四月に生徒に配布した。「古文ことば集」は古文を読むうえで基本的に必要な150語を選定し、語源や派生語等も記載したので、4年生は授業中つねに座右に置き、古語辞典として使った。

年間の実施授業時間数は次の通りである。

I 期 ① オペラ『古事記』を聴く

春にゆかりのある和歌・漢詩・俳句

2時間（「春はあけぼの」への導入）

② 『枕草子』

6時間

「春はあけぼの」「ありがたきもの」「古今の草子を」

③ 『今昔物語集』「羅生門」

1時間（「現代文」『羅生門』の関連授業）

④ 『沙石集』「児の飴食ひたる事」狂言について

4時間（教育実習生授業担当）

⑤ 『方丈記』

4時間

「ゆく河の流れ」「安元の大火」

⑥ 古典文法

8時間

係り結び・形容詞・形容動詞・助動詞「ず・き・けり・つ・ぬ・たり・り」

II 期 ① 『徒然草』

8時間

「高名の木登り」「仁和寺の法師」「園の別当入道」「花は盛りに」

② 古典三大随筆の冒頭から文章表記の変遷をみる

1時間

③ 『土佐日記』

8時間

「男もすなる日記」「阿倍仲麻呂のこと」「忘れ貝」「帰京」

④ 古典文法

5時間

助動詞「なり・たり・む・らむ・けむ」

※ I・II期通じて、自作「古文ことば集」を用いて授業を行う

※ 冬季休暇明けに各クラスで宿題テスト（1時間）、百人一首かるたとり（1時間）

## （2）授業実践

### ◇指導目標

- ①「随筆」・「日記」: 筆者の意図の正確な読みとりと多様な解釈の仕方から、古文を読み解く力を養う。  
古人のものの見方、感じ方、考え方を吟味しながら、自分自身のものの見方等と共通する点や相違する点を考え、思索を深める。
- ②「古典文法」: 古文の読解に必要な助動詞の意味や活用を習得する。助動詞一語が文脈に果たす作用を確認しながら、自分が用いている言葉を新たに見つめる契機とする。
- ③「古文ことば」: 古文を読むために必要な古文ことばの意味、ことばの語源や時代ごとの変遷を学習することで、ことばに対する興味関心を高める。

### ◇指導内容

#### ①「随筆」

・『枕草子』 I期の最初に取り上げた。中学校教科書に「春はあけぼの」だけが掲載されていたが、中学校ではあえて『枕草子』は学習せずに、4年生で他の章段と共に扱い、平安朝の感じ方・考え方や教養を学習することにした。

冒頭の「春はあけぼの」は、「春」を主題にした和歌・漢詩・俳句を導入として、読む。「春宵一刻値千金」と言われた「夕べ」ではなく「あけぼの」に視点を置いた清少納言の独自性を知る。また、和歌・漢詩・俳句とは趣の異なる散文のやわらかい文体、響きを味わう。

次に、「ありがたきもの」（高校教科書掲載）を読んだ。清少納言が取り上げる「ありがたきもの」

に現代との共通点や相違点を発見し、千年前を身近に感じる良い教材である。

最後に、「古今の草子を」を取り上げた。ここには平安時代の女性に必要な三つの教養について書かれてあり、古典を読むうえで必要な知識を習得することができる格好の教材でもある。

『枕草子』は5年生で「敬語」を学習するとき再度取り上げるので、4年生では清少納言の痛快なエピソードは紹介程度にとどめておいた。

- ・『方丈記』 「ゆく河の流れは…」という冒頭文が、2年生で学んだ『平家物語』の冒頭にも通じるものがあり、生徒にとって親しみやすい教材であると考えた。歴史の転換期、大火・地震という天変地異を背景にして世の無常を見据える筆者の視点を読みとる。その簡潔で読みやすい筆致に生徒は引き込まれていた。この時代の古文として今まで『平家物語』や説話を読んできたが、実際に生きていた人間が発する生身のことばは、4年生の感性を刺激していた。
- ・『徒然草』 兼好法師の独特のものの見方や考え方で、生徒の感性とすり合わせ、感性を磨くことができるものとして取り上げた。

「高名の木登り」では「あやまちすな。心しておりよ」、「仁和寺の法師」では「先達はあらまほしき事なり」という言葉の意味を理解し、それが現在にも通じる戒めであることを確かめる。

説話的な二話を読んだ後、重層的な構造になっている「園の別当入道」を取り上げた。ある物事をどう見るか、どう考えるか、物事を一つの視点からだけ見ないという筆者の視点はかなり難解と思ったが、生徒は興味深く読み、思考を練る。

「花は盛りに」は、『徒然草』で最も有名な段である。兼好法師が発見した「花」と「月」の美は、従来の美意識とは違うものであることを知る。それを、本居宣長の批判している文章と合わせて読んだ。二つの文章を読むことで、自分自身の美意識を見つめ直すことができると考えた。宣長の文章は生徒にとって刺激的であり、有名な古典といえども、その内容を「吟味すること」、「自分なりの意見を持つ」こと、違っていた場合には「批判する」こともできることを学んだ。

## ②「日記」

4年生の最後の古文として「日記文学」を取り上げた。ブログを公開している生徒も増え、人に読まれることを意識した日記文学は、十年前の生徒と違って受容が容易であった。

- ・『土佐日記』 「かなで書いたこと」「『古今和歌集』の編者であった紀貫之が筆者であること」を意識付けさせた。また、五十五日間の船旅を門出から帰京までの日記文学として読むことも心がけた。冒頭では「女性仮託したこと」に対して「面白い工夫だ」「客観的に自己を見ている」等、生徒は興味深く読んでいた。

次に百人一首でなじんでいる阿倍仲麻呂を引用している部分を読んだ。「和歌」に対する紀貫之の思い入れが引用によってうまく表現されており、『土佐日記』を読み進めるうえで良い教材となった。

「忘れ貝」では紀貫之夫妻の亡くなった女兒に対する思いが歌に込められており、共感を持った生徒が多かった。「貝」に思いを抱く日本人の「寄物陳思」を表すよい教材となった。最後の帰京の部分は、やっと故郷に帰れたのに荒れはてている自宅に対して、生徒も紀貫之と同じ気持ちになって落胆していた。このような自己の気持ちを吐露した日記文学は、4年生にとって親しみやすく、自分もその立場に立って考えられる教材であった。

## ③「古典文法」

- ・形容詞、形容動詞の活用と係り結びを学習した。
- ・3年生で学んだ助動詞「ず・き・けり」を復習した。





図2『土佐日記』「忘れ貝」授業プリント

二〇〇七年 二月 日 曜日 ( ) 組 ( ) 番 氏名 ( )

四年古文 その二十八 「日記文学」を読むー『土佐日記』③

一月下旬、紀伊の一行は海賊が出るという報告におびえる。一月三十日、夜は海賊が横行しないと聞き、水流の激しい鳴門海峡を横断する。二月一日、無事和泉の国に到着した。松原を眺めつつ船を滑いで北上するが、突然風波が高くなり、そこで泊まることになった。二月二日、三日船を出すことができず、二月四日になった。

(注) 参照

四日、楫取「今日、風、雲の気色はなはだ悪し。」

といひて、舟出ださずなりぬ。

楫取「しかし、ひねもす 波風立たず。この楫取は、

しかれども、

日も え はからぬ かたあ なり けり。

名詞…ばか君 「なり」断定

(注) 参照 (注) 参照

この泊まりの浜には、くさくさのうるはしき貝、

(注) 参照 (注) 参照

石など多かり。かかれば、ただ、昔の人をのみ恋ひつつ、

楫取「なり」存在 亡くなった人

舟なる人の詠める、



くさくさ

寄する波 うちも寄せなむ

うしてほしい

わが恋ふる人 忘れ貝 下りて拾はむ

(注) 参照 (注) 参照

### 3-2 今年度授業評価

今年度の授業評価として、

① 学校として今年度から実施した「授業に関する生徒のアンケート」とその分析

② 学年末に生徒が書いた「授業で印象に残ったこと、興味をもったこと」

を整理し、今年度実施した授業と「6年一貫古文教育の理論」に基づいて作成した「6年一貫古文教育のカリキュラム」との関連等について、自己評価を行う。

#### (1) 授業評価アンケート(報告書から抜粋)

古文の授業に関するアンケート

<対象学年・組・教科・単位数・人数> 4年A組 古文(2単位) 41名(男子21名・女子20名)

<調査年月日> 2006.10.17(火) 4限

<質問事項>

Q1 授業は楽しい

Q2 授業に積極的に取り組めた

Q3 授業ではそれぞれの課題を理解することができた

Q4 授業を進める速さは適当であった

Q5 授業での説明や質問事項はわかりやすかった

Q6 授業で用いるプリント等は理解しやすかった

Q7 教材の内容の質や量が適当であった。

Q8 授業を通して、古文のことばや文法を理解できるようになった

Q9 授業を通して、古文の文章を味わい、昔の人たちの感じ方や考え方がわかるようになった

結果集計

設問	男女	5				4				3				2				1				平均	
		男女別数	%	組数	%	男女別数	%	組数	%	男女別数	%	組数	%	男女別数	%	組数	%	男女別数	%	組数	%	男女別	組
Q 1	男	3	14.3	11	26.8	13	61.9	22	53.7	3	14.3	4	9.8	2	9.5	4	9.8	0	0.0	0	0.0	3.8	4.0
	女	8	40.0			9	45.0			1	5.0			2	10.0			0	0.0			4.2	
Q 2	男	2	9.5	5	12.2	13	61.9	25	61.0	3	14.3	7	17.1	2	9.5	3	7.3	1	4.8	1	2.4	3.6	3.7
	女	3	15.0			12	60.0			4	20.0			1	5.0			0	0.0			3.9	
Q 3	男	2	9.5	6	14.6	10	47.6	24	58.5	8	38.1	9	22.0	1	4.8	2	4.9	0	0.0	0	0.0	3.6	3.8
	女	4	20.0			14	70.0			1	5.0			1	5.0			0	0.0			4.1	
Q 4	男	6	28.6	12	29.3	10	47.6	21	51.2	3	14.3	6	14.6	2	9.5	2	4.9	0	0.0	0	0.0	4.0	4.0
	女	6	30.0			11	55.0			3	15.0			0	0.0			0	0.0			4.2	
Q 5	男	12	57.1	23	56.1	9	42.9	16	39.0	0	0.0	2	4.9	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4.6	4.5
	女	11	55.0			7	35.0			2	10.0			0	0.0			0	0.0			4.5	
Q 6	男	6	28.6	14	34.1	13	61.9	24	58.5	2	9.5	3	7.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	4.2	4.3
	女	8	40.0			11	55.0			1	5.0			0	0.0			0	0.0			4.4	
Q 7	男	2	9.5	7	17.1	14	66.7	23	56.1	3	14.3	8	19.5	2	9.5	3	7.3	0	0.0	0	0.0	3.8	3.8
	女	5	25.0			9	45.0			5	25.0			1	5.0			0	0.0			3.9	
Q 8	男	3	14.3	7	17.1	8	38.1	19	46.3	9	42.9	14	34.1	1	4.8	1	2.4	0	0.0	0	0.0	3.6	3.8
	女	4	20.0			11	55.0			5	25.0			0	0.0			0	0.0			4.0	
Q 9	男	3	14.3	9	22.0	5	23.8	10	24.4	8	38.1	15	36.6	4	19.0	6	15	1	4.8	1	2.4	3.2	3.5
	女	6	30.0			5	25.0			7	35.0			2	10.0			0	0.0			3.8	

Q10 授業で印象に残っていること、興味深く感じたことについて自由に書いて下さい

- ・古文の意味がわかると、感心して面白く感じた。
- ・現代語訳がわからなくて教えてもらって理解できた時が、すごく爽快だった。
- ・最初は単語などわからなくて文章が読めなかったことが多く、知識が増え解ってくると、段々面白くなり、形がかわったものを読めるようになる。いろんな文章が読めるので毎時間楽しみです。
- ・古文を読むと、社会で習った以外に昔の人たちのいろいろなことがわかった。
- ・昔の人々は「人生」について今の人々より深く重く考えているのだと感じた。
- ・古い話の中で、今風の物語とちがった人々の考え方や発想を味わえた。
- ・『枕草子』『方丈記』『徒然草』などの随筆を通して昔の人の感じ方とかわかっておもしろかった。
- ・古文も書かれた時代によって、分かりやすいものとそうでないものがある。
- ・授業はとてもいいに分かりやすく、古文がきちんと理解できます。
- ・小テストもこまめにしてくださり、工夫されたプリントなど、授業はとても楽しい。
- ・単なる古文の解説だけでなく、「たとえば」という例がたくさんあったのが印象に残っています。

(2) 生徒の授業感想

学年の最後に、生徒に「授業で印象に残ったこと、興味をもったこと」を簡単に記述してもらった。その抜粋を記す。

『土佐日記』について

- 四年の授業の中で私は『土佐日記』が好きだった。女性仮託をするような愉快な考え方で自分を客観的に見た形で自分の心情を日記にしていけることは、そうすることで見えていなかった自分の別の面を紀貫之は感じることができたと思う。「和歌における自分の本音を、いかに第三者が予測して語るような形で書き表すのか」というところに、おもしろみもあると感動している。
- 最近授業を受けた『土佐日記』が一番印象に残っている。古語を通して紀貫之やその婦人の子を失った気持ちが伝わってくるからだ。もちろん、作品中、夫婦が詠んでいる歌からもその気持ちが察せられるのだが、私は何より筆者の「女性仮託」という作品の作り方が、親が娘を想う気持ちを表していると感じられるのだ。確かにひらがなを使った新しい文学という試みもあると思うが、「もし生きていれば…」という気持ちが女性の手で紀貫之に日記をつづらせたのかもしれない。娘は女性であるのだ。
- 掛詞や歌が至るところに散らばっていたが、どれも親しみがあ面白かった。古典な

んて読んで面白くないと思っていたが、現代語訳をして作者の言っている意味を理解するといろんな景色（気色）が分かってどんどん読めた。

### 「日記」について

- 日記が印象に残りました。今も昔も習慣などは違っても「日記を書く」という動作の共通していることがおもしろかったです。今あるブログという日記と似ていることから、人間の性質は何百年経っても同じなんだなと思いました。

### 『枕草子』について

- 私は『枕草子』が興味深かったです。それは清少納言が扱った題材がとてもおもしろかったのがあります。彼女の視点や思考が非常に女らしくて、私とその当時の女性のおしとやかさや美しさを文面から感じとれた作品です。
- 私は『枕草子』がとても印象的です。若い人が書いていることもあってか内容も非常になじみやすく楽しめました。読んでると共感できるところが多くあり、昔も今も人の感じるところは変わらないのだなと思い、古典というものは自分が思っているより身近であることを知りました。

### 『方丈記』について

- 『方丈記』が興味を持てた。日本らしさがあって、仏教の教えの一つである無常を書いているのがよかった。無常だけでなく人生の教訓として成り立っていると思う。
- 「久しくとどまりたるためしなし」私が四年の古文の授業で一番心に残った言葉です。ずっと元氣だった大好きな祖父を亡くし、何でそんなことになったのか、何で祖父が死ななくてはならなかったのか。どうしようもないことだったけれど、そのときは神様も他人も自分さえも恨みました。けれどそんな時にこの言葉と出会い、私ははっと気づかされました。人が死ぬのは当たり前のことで、それは不公平ではなく、何より平等で。私はそう気づかされました。

### 『徒然草』について

- 庖丁の達人が鯉をさばくという話がとても印象に残っている。ある人がその話を聞いて批判し、またある人が批判したことを話に聞いて批判する、という話の連鎖。やはり、一つの物事には、いろんな角度から、いろんな見方をすることができるし、それが大切だと感じた。
- 私が印象に残ったことは「高名の木登り」の「気がゆるんだ時が一番危ない」という言葉です。こんなに立派な言葉をただの木登りが心得ているのはすごいという話ですが、私は身分の高い人ほど分からない言葉なのでは、と思います。僧などは別ですが。私はこの教えを自分にしみこませて「安心するのは終わってから！」という精神で毎日を過ごしていきたいです。

### 「ことば」について

- 古文を勉強しているうちに、外国語だと思った。特に『徒然草』は知っているようで知らない単語にたくさん出会って「言葉は変わる」と思ったことが印象に残っている。
- 「美しい」という意味を表す古語がいっぱいあるのにおどろいた。

### 「文法」について

- 古典での文法に興味を持ちました。僕は英語が好きなのですが、古典文法の中でも助動詞が一つの単語で文の意味や内容を変える所が英語とはまた違い、とてもおもしろいと感じました。それに加えて古語を知り、現代の言葉と比較し、その違いや共通性を見つけられたことはおもしろいと感じました。
- 今年の授業の中で強烈に印象に残ったことは「助動詞」です。そのめんどくさい活用、意味、接続を覚えるのが大変でした。初めは「現代語訳はフィーリングでいけるから助動詞なんかいら

ない！！」と思っていましたが、助動詞と理解して現代語訳する楽しさにはまってしまいました。  
「～なりけり」など「けり」は連用形につくから、その上は「なり！」「おーすごい」と訳するときに感動の連続です。古典は現代語のもとなので現代語でも助動詞は大きな意味を果たしているのではないかと！と思いました。

#### 「授業全般」について

○実際に文章を読むこと。確かに日本語ではあるが、今の日本人とは遠い存在の古文。そんな遺産を読むことは、少しばかり難しいものであるが、今も昔も変わらぬポイントを見つけるような時は、大変うれしく思う。だから、興味深く思う。

○私は特に「これ」というお気に入りを持っているわけではない。授業で扱われた作品はどれもみんな好きだし、面白い。中でも私は生徒の中では京都に近い住所なので、京都が舞台の作品にとっても興味がわいた。石清水八幡宮のお話は、小さい頃に行ったことのある場所だったので、とてもリアルにおもしろく読めたと思う。これからも京都が舞台の作品を読んで自分の故郷に愛着を持つとともに京都から身近な奈良、大阪にも目を向け、その地を訪れたいと思った。

#### (3) 自己評価

- ・随筆、日記を主にして授業を変更したことについて。随筆では、中古から中世にかけての日本人の考え方や美意識などを学習することができた。日記では、『土佐日記』の全行程を網羅した学習ができ、その中で親の子に対する愛情や「寄物陳思」は、今も変わらないものであることなどを学習した。そんななかで、古文は古い文章で現代とは関係がないという、古文に対するよくある意識が払拭でき、『土佐日記』の全文を現代語訳で読もうとする生徒がいるなど、古文への学習意欲が高まった。そのことは、生徒の授業アンケートのQ1、Q2にも表れている。特に女子が古文への関心が高い。このアンケートは、『方丈記』が終わった時点で取ったものであるが、学年末の「授業感想」にも表れている。生徒たちは古文の内容を深く理解し、自分たちの感性や考え方との関わりをいったん持ち始めると、古文への興味・関心が高まっていくことがはっきりと分かる。
- ・授業方法について。わかりやすいプリント作成を心がけた。その成果は、授業アンケートQ6に表れている。しかし、文法を主とした時間は睡魔との戦い、勉強のため仕方ないが面白くない等、苦痛を感じる生徒も、授業アンケートQ8を見ると少しいる。生徒の「授業感想」にある「文法事項の発見、驚き、喜び」を感じられる生徒を一人でも多く増やしていきたい。
- ・全体として見ると、4年生は、1年生から「6年一貫古文教育の理論」に基づくカリキュラムに従って教えてきた生徒たちである。その成果として、古文を読み解く力が確実に身に付いていると言える。それは文法事項の進度、内容の理解、応用問題の読解に見ることができる。

#### 3-3 次年度への課題

- ・4年生の成果を基に、「女流日記文学」『伊勢物語』『大鏡』に進み、女性の生き方・愛の形・歴史観についての理解を深める。
- ・文法は残りの助動詞を終え、いよいよ古文の最後の関門「敬語」に取り組む。
- ・大学入試センター試験に対応できる「古文ことば集」第2集を発行する。
- ・多様化する入試問題に対応できる力を養う。